高松藩留学生のこと

竹 中 龍 範

1. はじめに

封建体制が崩壊し、わが国が近代化の道を歩みだした時に大いなる貢献をなしたものとしてお雇い外国人とともに取り上げることのできるのが海外留学生である。海外渡航が許されなかった幕末期にあつては諸藩から長崎、江戸、大坂等に遊学し、蘭学を通して様々な知識を修得することが通例であつたが、開国後、明治維新を迎えて留学が許されるようになると、官費、藩費、私費による海外留学生が西欧諸国に学び、それぞれ研学の成果を携えて帰国、各分野に活躍することとなった。渡辺（1977）の「明治国家の近代化の直接の原動力となつたのは、幕末・明治時代における海外留学生による研究成果であるといつても過言ではない。それは日本近代史のなかの人文科学系列と自然科学系列との二大分野にわたるものであり、これらを総合包括したものを分析帰納してはじめて、明治国家の近代化の様相をとらえることができると思う。」（⑩：p. 17）という指摘に対し、国家レベルでの考察とともに、彼らの派遣時の事情を勘案すれば、各藩のレベルでの考察も必要であると言えよう。廃藩置県後、藩費留学生の多くは官費留学生に切り換えられ、帰国後は明治政府の施策に従っている場合が多いが、少なくとも出国の際は藩の期待を担って祖国をあとにしたはずである。

本小論では明治維新後、高松藩における一連の改革の中で、いかなる背景のうちに山田純吉はかの英国遣学が決定され、どのような形でそれが実施にうつされたかという点について考察を加える。

2. 幕末・明治初年期における高松藩の教育改革と英学的土壌

幕末期、各藩における洋学導入の実態を概観してみると、高松藩の場合は、医師などによる個人レベルでの蘭学研究を除けば、かなり後発であると言わざるをえない。もっとも、讃岐国でも丸亀藩およびその支藩である多度津藩では藩費の教育課程中に洋学の導入が見られないことを考えれば必ずしも時勢に遅れたとは言えないであろうが、それにしても四

国の諸藩を見ただけでも伊予の宇和島藩をはじめ、土佐藩、徳島藩など、先進の藩がいくつか挙げられる。高松藩の洋学導入は慶応元年のことであった。

ここで、洋学関係事項を中心に、幕末・明治初年期における高松藩の教育改革を概観しておく。慶応元年乙丑第11代藩主頼聰の時、藩費講道館中に洋学校が設立され、藩士及び子弟に教授せしめた。始めは蘭学であったが、のち英学に改め仏学を兼ねさせた。(③：p. 87) 次いで、明治2年11月、従来の学制が改革され、皇・漢・洋三学兼修の制となり、また大中少教授、同助教、準少教授、少助教の職がおかれた。明治3年10月、規則九箇条が撰し設けられ、易・天文・習字・算・編修の諸科が置かれた。明治4年4月には学制大意八則及び寄宿舎規則十三箇条、同内規則三十八箇条が撰定された。この学制大意の中に洋学教育の目的が「至於洋学則洞觀各国之形勢考其政体察其事情隨時變通以洗旧習之陋」と謳われている。同月、学科及び日課表が定められ、また、大少舎長が置かれ、寄宿生等級及び月給が定められた。同年5月、講道館が増修され、隣邸玉井某の旧宅を併合した。また、同年、学科を中小学の二等に大分し、通じて四課に小分した。そして、改めて教長、教授、上中下助教及び句読生を置き、教長以下の給料を定めた。この間、明治4年3月3日には教育改革の一環として山田純吉・高原弘造・松田周次の3名を英国に遣学せしめている。(③：p. 156)

一方、このような藩洋学所〔洋学寮とも〕における洋学研修に対し、遊学による洋学研修も見られるようになる。渡辺（1977）には「諸藩の遊学について、維新前後から明治四年の廃藩置県前までの状況をみると、これまでよりも一層留学規模は拡大される。」として高松藩の例が挙げられている。すなわち、「藩費遊学を新たに許可する藩も各所に出現する。高松藩では漢学か医学を勉強する者に限って私費遊学を許可してきた。しかし維新前に洋学を急務とするようになって、その学資をすべて藩費をもって支給せざるを得ないというように、維新前になって藩費遊学をはじめている。」(④：pp. 203—204) ここにも藩の洋学に対する姿勢が伺える。

また、当時の国家レベルにおける教育政策との関係で高松藩の場合を見ると、大学南校への貢進生派遣を取り上げるべきであろう。貢進生制度についてはすでに多くの文献に録されているところであるが、「大学南校ニ於テ外国教師御雇相成人材育成被為在候間、藩々ニ於テ

現高拾五万石以上	三人
同 五万石以上	二人

高松藩留学生のこと

同 五万石未満以下 一人

右之通十六歳以上二十歳マテ人材相選、来ル十月迄ニ南校へ可差出候、云々」をうけて、石高12万石の高松藩は2名の貢進生を大学南校に派遣している。倉沢（1986）には、

こうして諸藩の貢進生は、予定の期限よりかはるかにおくれ、明治三年閏十月から翌四年正月下旬にかけて、順次大学南校へ入舎した。いま明治四年正月二十二日改めの「貢進舎生姓名簿」を見ればつぎのようである。

貢進舎生姓名簿

未正月廿二日改

人員三百拾人

英 式百拾九人

内 仏 七拾四人

独 拾七人

として各藩からの貢進生の姓名が列挙されているが、高松藩からの貢進生としては、阿部静造、綾田桃三の姓名が挙げられている。（⑤： pp. 623—624）

このように留学生派遣の背景を概観してみると、幕末期、藩費教学中に洋学を導入したのが他藩に比べて遅かったとはいうものの、維新後の教育改革は洋学を重視しながら急速に推し進められていったことが理解できる。このような流れの中における留学生派遣はどのような意義をもったものであったのだろうか。

3. 高松藩留学生

かくして、藩の期待を担って英国留学生が選抜されることになるが、当然その人選はすでに英語を学習して一応のレベルに達している者の中からはなされることとなる。この点については、

高松藩では幕末より明治の初年に向け山田純安、松田周次、高原弘造、東原宜兼、阿部某の徒があり既に英語の研究に志し大阪に出で、修業してゐた。藩主に於ても大いに洋学研究の必要を感じ明治四年三月三日山田純安、松田周次、高原弘造の三名に命じて英国に留学せしめ夫々研究せしめた。東原宜兼は残りて一時大阪府に出仕、其の後帰藩して藩の洋学寮に用ひられ本藩英語研究の為に功あり、多くの子弟を薰陶した。（⑩： p. 182）

という状況があって、山田純安、松田周次、高原弘造の3名が選抜されたものである。なお、上記引用文中「阿部某」とあるのは、前述の高松藩貢進生阿部静造のことであろう。「貢進生選挙心得」の第二項「一 兼テ洋学研究致居候者有之候ハ選挙勿論之事」をうけての選抜であつたろうことは充分考えられる。

遣英留学生3名の経歴については以下の如くであるが、『高松市史』(⑩: pp. 182-183)によって、適宜他の資料も援用しながら略記する。

山 田 純 安 <(1839~1901)>

名は有秋、字は士穡、〔幼名禎次郎、通称初純安、次純吉、後純安に復す〕撫松と号し〔又字有礼又審卿〕高松藩医山田景純の孫である。〈山田三純の二男として、天保十年生まれた。〉学漢洋を兼ね〈漢学を片山冲堂に習った。大坂の緒方洪庵の塾に学んで帰る。高松藩登仕録(文久三年四月)に、薬坊主、五人扶持とみえている。〉大阪に出で、英語を研究、明治四年三月藩命により英国に留学して専ら鉱山学を学び同八年帰朝工部省の技師となり小坂阿仁面谷等の鉱山を監督す。同二十年辞して古川鉱業所に入り〔其の理事兼鉱務課長となれり〕明治三十四年七月五日歿。年六十三。――〔 〕内挿入は(④: pp. 579-580)、〈 〉内挿入は(⑧: p. 450)による。

松 田 周 次 <(1843~1923)>

〈もとは、香川郡三名(さんみょう)村の高尾家に生まれ、嘉永二年、笠居村(上笠居)に移る。〉明治の初年既に大阪に出で、洋学を研究した逸材にして〈十八歳の慶応元年の秋、長崎に出て、つとに洋学をまなんで帰り、二十一歳、大阪にでる。／高松藩松平家屋敷に住み、藩から三人扶持をもらっていた。／学問をこころざして、優秀の人物だったので、明治二年、二十二歳、藩から学資金をたまわり、同四年まで、大阪の洋学校、御備大学別当得業生となる。〉同四年三月藩命により英国に留学、土木学を専攻し、〈明治四年二月、高松藩命で、とくに選ばれて、山田純安、高原弘造とともに、英国に留学した。／三月三日、横浜出帆、明治六年十二月には、文部省の海外留学生となり、もっぱら土木工学を研究し、明治八年九月四日、帰ってきた。〉帰朝の後鉄道寮に入り技師となる。〈帰るとただちに工部省にはいり、鉱山、鉄道などの方面の仕事をして、大いに手腕をみとめられた。勅任技官となる。〉晩年湘南の地に退隠余生を送る。〈退官してからは、千葉県佐古町に住みついて、柑橘栽培に余生をおくった。大正十二年九月一日の関東地方大震災のさい、北條町で死去した。歳

七十五。〉——〈 〉内挿入は（⑧： p. 425）による。

高 原 弘 造

山田純安、松田周次等と共に明治四年三月藩命により英国に留学、専ら建築学を研究し帰朝の後工部省工学寮に入り御雇技師英人コンドルの助手となる。後辞して日本土木会社の技師長となる。

かくして、留学生人員が決定され、藩による手続きが開始される。藩はこの3名の留学許可を弁官に願ひ出る。明治4年2月のことであった。弁官は同月晦日、これを許可し、次のように外務省へ通牒した。（⑤： pp. 690—691）

高松藩士族

山 田 純 吉

松 田 周 次

高 原 弘 造

右ハ英国留学願之通聞届候間、免状渡方之儀例之通御取計可レ有レ之候也

この留学許可により山田ら3名は明治4年3月藩費留学生として渡英する。

この年、藩の学校経費はこの藩費留学生の派遣を含むために次のような内容となっていた。

〔明治四年〕十二月 藩校一ヵ年の経費は、つぎの通りであった。国学費金七百四十三両、支那学費二千七百十二両、洋学費三千六百四十八両、算学手跡費二百三十七両。藩校の教長六名、教授十名、助教六十三名、寄宿生千六百五十四名、通学生百三十六名。（⑨： p. 131）

『新修高松市史 II』は、この経費配分に基づいて、「洋学費が多いのは、同年三月から、旧高松藩士松田外二名をイギリスに遊学させた。まことに進歩主義的な空気がうかがえる。」（⑧： p. 542）と評価しているが、確かに、洋学費三千六百四十八両のうち、留学生派遣の必要経費を差し引いた額がどれくらいで、その使途がどうであったか判然としないうが、漢学生数と洋学生数とを比較してみれば、洋学にあてられた経費はかなりなものであったことはうかがえる。しかし、当時の状況をひろい視野から眺めてみると、この頃高松藩に進歩主義的な空気があったとするのは早計に過ぎるのではないと思われる。四国

の中でも土佐藩などの藩費留学生派遣とくらべてはるかに規模は小さく、維新政府が薩長土肥の勢力によるものであることを差し引いても、高松藩籍の人物による私費留学も記録にない。この当時、洋学の導入、海外留学生の派遣というようなことは多くの藩においておこなわれたことであって、独り高松藩の事例を特筆する必然性はないと言えよう。

4. 藩費留学生から官費留学生への切り換え

このような経緯をへて高松藩遣英留学生山田純吉、松田周次、高原弘造の3名が明治4年3月3日横浜より英国留学の途につく。しかしながら、祖国日本の政情は変革に急で、廃藩置県により同年7月14日、旧高松藩が廃されて高松県が置かれ、11月15日には丸亀県および倉敷県の一部と合して第一次香川県が置かれた。一方、政府は行政、教育の中央集権化を推し進めていく。その流れのなかで、各藩によって派遣された藩費留学生の費用を政府の支出によってまかなう方針がとられる。倉沢（1986）は、

新政府にとって、洋学人材の育成は焦眉の急務だったから、これらの藩費留学生にはあらためて政府から留学を命じ、藩費を官費に切りかえた事例がすこぶる多い。（中略）このようにして四年七月の廃藩の頃までには、相当多数の藩費留学生が官費に切りかえられたが、廃藩以後は残りの藩費留学生もすべて官費に切りかえられ、新設文部省の管轄下に入ったのである。（⑤： pp. 702—703）

と述べているが、高松藩留学生の場合は廃藩以後の切り換えであった。

明治5年香川県の教育政策に一部変更がおこなわれ、これによって遣英藩費留学生が官費留学生に切り換えられることになる。その経緯、大蔵省への伺いは下記のとおりである。

明治五年二月従来上中下助教を改め一等等三等助教と定め称した。同年三月廿四日旧高松藩が置く所の公費生徒を廃した。同年四月大蔵省に稟議し、英国留学生山田純吉外二名の学資金を下附せられんことを願い、同月九日指令洋銀五百ドルを一名宛に支給された。（③： p. 174）

明治五年四月大蔵省伺

一、 洋金札千五百元

但壬申六月ヨリ同十二月迄半年分老人五百元宛

旧高松藩士族

高松藩留学生のこと

一ヶ年学資金各一千元	山 田 純 吉
同	松 田 周 次
同	高 原 弘 造

右ハ旧高松藩見込ヲ以伺済之上昨辛未三月以来公費ヲ支給シ英国留学申付有之ニ付
先般所分之義文部省へ相伺出候処先以従前之通相心得学資金ノ義ハ御省へ申出受取候
様可致トノ御附紙ニ候当四月中旬欧米各国へ一般ノ学資金被差立候ニ付当月十日迄ニ
無遅延可納出言文部省ヨリ御布達ニ付右学資金至急御下渡被下度此段奉願候以上

壬 申 四 月

香 川 県

大 蔵 省 御 中
指 令

書面之趣聞届候生徒三名半ヶ年ノ学資金洋銀千五百元相渡候条受取方申出事。

壬申四月九日

大蔵大輔

井 上 馨

(③： pp. 180—181)

こうして、官費により英国において研学をつづけた3名の留学生は、すでに略伝に述べたごとく、帰朝後ともに工部省に入り、それぞれ留学中に学んだ分野において近代日本の発展に寄与している。

5. お わ り に

幕末、藩主松平頼聰が大老井伊直弼の開港論に同調しながらも、維新の際は佐幕の姿勢をとって朝敵の汚名を着せられた高松藩ではあったが、明治に入ると西洋文明移入の積極策をとっている。洋学所設立とならんで藩費留学生の派遣はその重要な一幕であった。山田純吉、松田周次、高原弘造の英国派遣は当時高松の地において英学を学びつつあった人人にどれくらいの刺激を与えたであろうか。しかしながら、他藩の藩費留学生と同様、かれらもまた、途中官費留学生に切り換えられ、帰朝後は地元へ直接の貢献をすることがなかった。歴史研究にifは禁物であるが、かれらが英国における研学の成果をもたらして高松の発展に尽くしていたならばと思わずにはいられない。

今回の調査は高松藩遣英留学生の派遣をめぐる問題を扱ったが、資料面の制約もあり、かれらの留学先についても、研学の模様なども明らかにし得なかった。また、資料によって記述内容に食い違いがあるところもある。いずれも今後の課題としたい。

引用・参考文献

- ① 池田哲郎「四国英学史（下）一讃岐と阿波一」『英学史研究』第2号，（1970）， pp.99—112.
- ② 池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林，1979）
- ③ 香川大学学芸学部同窓会編『香川県教育史』（香川大学学芸学部同窓会，昭和28）
- ④ 梶原竹軒監修『讃岐人名辞書』（高松製版印刷所，昭和11³： 藤田書店，昭和25再発行）
- ⑤ 倉沢剛『幕末教育史の研究 三』（吉川弘文館，昭和61）
- ⑥ 四国新聞社出版委員会編『香川県大百科事典』（四国新聞社，昭和59）
- ⑦ 高松市史編修室編『新修高松市史 I』（高松市役所，昭和39）
- ⑧ 高松市史編修室編『新修高松市史 II』（高松市役所，昭和41）
- ⑨ 高松市史編修室編『高松市史年表』（高松市役所，昭和35）
- ⑩ 高松市役所編『高松市史』（高松市役所，昭和8）
- ⑪ 福家惣衛『香川県近代史』（上田書店，昭和34）
- ⑫ 渡辺實『近代日本海外留学生史 上』（講談社，昭和52）

THREE STUDENTS SENT TO ENGLAND
BY THE TAKAMATSU CLAN

Tatsunori Takenaka

At the beginning years of Meiji era the Takamatsu Clan carried out a series of educational innovations. Among them were the establishment of the Institute of Western Studies and sending three students to England. The students were Junkichi Yamada, Shuji Matsuda, and Kozo Takahara. They had been studying English in Osaka when they were selected as the students to be sent to England on scholarships from the clan. They left Yokohama on March 3, 1871. While they were studying engineering in England, the Japanese Government replaced the clan in 1872 to provide them with new scholarships. Thus they worked for Koubu-sho (Ministry of Engineering) after they returned to Japan and made a large contribution to the development of modern Japan.